【第一回】

高千穂神社

神話のふるさと 特集 全伍回

宮司が語る

【第一回】

高千穂神社

たかちほじんじゃ

天孫降臨の地、夜神楽の郷として、近年注目を浴びている高千穂。
その高千穂18郷にわたる88社の総社として、地域の人々の崇敬を集めてきた
高千穂神社宮司・後藤俊彦さんにお話を伺いました。

● 参拝者を迎える銅板でできた大きな鳥居

臼杵の郡の千穂の里

高千穂神社は、天孫降臨したニニギノミコトからウガヤフキアエズノミコトまでの日向三代と称される皇祖神とその配偶神、加えて、十社大明神といわれるミケイリノミコトとその妻子10神を御祭神とします。約1900年前の垂仁天皇時代の創建とされ、高千穂88社の総社でもあります。

高千穂町の由来は、『日向國風土記』の中にあり、ニニギノミコトが降臨した際に「高天原から持ってきた稲の穂を抜いてその籾種を四方に撒いたところ、たちまち日月光り輝いて、光明の世界が拓けてきた。従ってこの地を臼杵の郡の千穂の里と名付けた」ことだとされます。また、高千穂神社は、神武天皇の兄であるミケイリノミコトが暴れていた鬼八を退治した後、国家鎮護の祈りを込めて日向三代を祀って創建したともいわれています。

● 高千穂神社の神楽殿

● 人の悩みや世の乱れを鎮めると言われる「鎮石」

創建にまつわる鬼八伝説と猪掛祭

昔から高千穂神社は高千穂峡一帯を境内地としていましたが、地域との結びつきの強さは、神社に伝わる祭礼からも感じられます。

6月31日は夏越の祓い。高千穂神社では人形（ひとがた）流しという独特のお祓いも行われます。参拝者は、茅の輪をくぐった後、1年間の罪穢れを人形に切った紙で体をなでて、神社に奉納します。その人形は、宮司がお祓いをした後に、高千穂峡に流しに行くのです。

また、毎年旧暦の12月3日には猪掛祭が行われます。これはミケイリノミコトが退治した鬼八の魂をしずめるために、鬼八の好物だった猪を奉納するもの。鬼八は退治された後も何度もよみがえり、早霜を降らせて作物を腐らせたため、猪を奉納し鎮魂することで早霜の害を防いだとされます。

「私が神職に就いて41年になりますが、毎年旧暦12月3日に今も行っています。自分の代で変えて、何かあっても困りますから」と笑いながら話す後藤宮司に、伝統を守り続けることの意義、役割の重さを垣間見ました。

このような祭礼を長く受け継いできたのは、夜神楽を今なお守り続ける、地域の人達の力もあるかもしれません。

「神社はもともと、地域性と家族性が結びつくところ。夜神楽は、その年一年良いことがあった家も悪いことがあった家も一緒になって、共同体の一員であることを再確認する場でもあるのです」。

神社に参拝する若者が増えたのは、「日本人としてのルーツを知ることで安心するからでは」と語る後藤宮司。

村の人々が共同体として生活をしていた古き良き日本の形を今に留めるからこそ、地方から発信できることがあるはずと強く語っていました。

● 鬼八を退治するミケイリノミコトの彫刻

● 手を繋ぎ３周すると、夫婦円満・家内安全・子孫繁栄が叶うとされる「夫婦杉」

平成26年10月31日

高千穂神社　宮司

後藤 俊彦　ごとう　としひこ

昭和20年　宮崎県高千穂町生まれ。
九州産業大学商学部卒業後、國學院大學神道学専攻科、ならびに日本大学今泉研究所を卒業。
昭和56年　高千穂神社禰宜を経て宮司就任。
昭和62年　神道文化奨励賞受賞。
以降神社本庁評議員、神道政治連盟副会長、神社本庁九州地区講師、高千穂町観光協会会長を歴任。
平成26年　神社本庁より神職身分特級を授かる。

【第二回】

尾八重神社

神話のふるさと 特集 全伍回 宮司が語る

【第二回】

尾八重神社

お　は　え　じ　ん　じ　ゃ

尾八重神楽。その舞は、先人達が自然と共存共栄していく中でできた生活様式や文化から生まれ、またそれらを現代に伝えています。神楽を守り続ける尾八重神社の中武貞夫宮司に、お話を伺いました。

山の暮らしの中心的存在

九州山地の中央部一ツ瀬川の支流尾八重川。その流域の米良山中に西都市尾八重地区があります。ここに伝わる尾八重神楽の起源は、12世紀の鎌倉時代に神主として都万（つま）神社に奉仕していた壱岐宇多守（いきうたのかみ）にあるといわれています。壱岐宇多守は山歩きが好きで、米良山中を山歩きする途中、尾八重の一本杉に出会います。その圧倒的な存在感のある姿を見て己の存在の小ささに気付かされます。自然の中で生活しながら法者（ほじゃ）の道を究めるために修験者の道を選び、修験道場として尾八重地区に“湯之片（ゆのかた）神社”を開いたと伝わります。

尾八重地区は湯之片神社が建立される以前から、先住の人々が生活する山の恵みの豊かな土地でした。壱岐宇多守は山岳修業をしながら、神主として集落ごとに鹿倉宮（かぐらぐう）を置き、先住者が行う狩猟祭りと合わせて、焼畑農法のための火伏祭りも斎行したとされます。そうした山の暮らしのなかにある“お祭りごと”を後世まで伝えるために、神楽伝習所を設け、神楽の普及にも努めました。壱岐宇多守は後に湯之片若宮大明神として祀られ、尾八重神楽の中では最初に降臨する神として花鬼舞（はなおにまい）が奉納されます。

永正8年（1511年）に尾八重神社が領主黒木吉英（くろぎよしひで）により建立され、以来尾八重地区の重要な神社として篤く崇敬されてきました。特に神楽においては、古くは、舞人を務める家々で一番ずつ世襲し一子相伝を課すなど、大事に伝えられてきました。それが、毎年秋の例大祭で奉納される尾八重神楽です。

● みやざきの巨樹百選に選ばれた尾八重の一本杉

● 尾八重神楽について熱く語られる中武宮司

● 尾八重神楽奉納の様子

生きることへの感謝を神楽の中に

「尾八重神楽は33番あり、神楽を舞う神庭の飾りは月の蘇生と女体を表す独特のものです。壱岐宇多守は、己が世の中に生まれてきたことを解き明かすために修験の道に入りました。だから、尾八重神楽は、“生きていることに感謝し祭祀をしていた先住民の様子”を舞の中に入れているんです」と中武宮司は語ります。神楽は人に見せるためのものではありませんが、尾八重神楽によって伝えられてきた「生きることへの感謝」ということを伝えられ、交流に繋がるのであればどこでも出かけていきたいと中武宮司は言われます。

平成26年10月に台湾の台南市で神楽を披露したのも、現地に自然崇拝思想が残っており、交流を行う事で現代で薄れつつある自然崇拝の心を思い起こすことに繋がるのではと、現地の方に言われたことが背中を押したといいます。「尾八重神楽にも後継者不足問題があります。しかし893年前の先人達が編み出し伝承してきたことを、後世に受け継いでいく責任がある。だから必死に守っていきます」と笑顔で力強く語ってくれました。

● 台湾で奉納された尾八重神楽

● 日台交流イベントの様子

● 日台交流イベントの様子

平成26年11月11日

尾八重神社　宮司

中武 貞夫 なかたけ　さだお

昭和12年　8月1日　西都市尾八重に生まれる。
5歳の時に母の実家である湯之片神社に預けられ、
壱岐家が守り伝えて来たことを教えられる。
昭和42年　尾八重神社に出仕。神職の道に入る。
平成14年　尾八重神社宮司に就任。

【第三回】

船引神社

神話のふるさと 特集 全伍回

宮司が語る

【第三回】

船引神社

ふなひきじんじゃ

ここ船引は、宮崎市・清武町の中で今でも農業の盛んな地域です。
土地を守る産土神として、地域の方から親しまれる
船引神社の宮司・田代敏徳さんにお話を伺いました。

地域を見守る大きな存在

船引神社の創建は平安時代末期と言われています。全国的に八幡神社が多く建てられた時代に、船引神社も八幡神社として創建されました。主祭神は仲哀天皇、神功皇后、応仁天皇だとされます。

社殿裏にある大クスは、樹齢約900年、根回り約18メートル、木の幹の部分は約8畳の大きな空洞になっており、戦時中は防空壕にも使われたそうです。財政難に陥った際、大クスを切り倒して樟脳にすることが決まったものの、その日の夜に狐が大騒ぎをしたため、切り倒す話は取りやめになったという伝説もあるとか・・・。

「台風で、大きな枝が折れて弱った時もありますが、今は元気な姿を取り戻しつつあります。ここのクスは樹形が素晴らしいでしょう。ちょうど牛が横たわったようにも見えるのです。クスがもっと元気な時は、地域の子ども達の格好の遊び場所でもあったのですよ」と田代宮司は語ります。

11月中旬には、シイの木の根元に生えるヤッコソウが可憐な花を付け、目を楽しませてくれます。

● 県下最大級のクスノキ

● シイの木の根元に生えるヤッコソウ

神楽に見る地域の祈り

船引神社では、県指定無形文化財である船引神楽が元旦と春分の日に奉納されます。船引神楽は、高千穂町などに伝わる夜神楽とは異なり、昼間に舞われる春神楽や作神楽と言われるものです。農業が盛んな地域であることもあって、稲作をする一連の動作が神楽の舞の中にあります。また、笛や太鼓の調子が一番ごとに違うため、神楽の一番だけを取っても、大変見応えがあるといいます。

「実は、船引神楽は明治時代に一度絶えかけたのです。しかし地元の人の“神楽を伝え続けたい”という思いが強かったのでしょう。串間神社の神楽が船引神楽によく似ていたため、少年3人が串間神社の神楽を習いに行き、そこから今日まで伝え続けています」と田代宮司は語ります。

また、毎年敬老の日には、五穀豊穣や家内安全などを祈願する“臼太鼓踊り”も奉納されています。臼太鼓踊りとは、太鼓を叩き、背中の旗をひらめかせて勇壮に舞う踊りです。太鼓の中に槍などを隠して攻め入ったという、神功皇后の朝鮮征伐の様子を表していると言われています。

参拝の際には、社殿にある2対の雲龍巻き柱を是非ご覧ください。1本の木から彫られた見事なつくりで、柱に巻き付いた龍がまるで命を持っているかのように生き生きとした表情をしています。

農業が盛んなこの地域で、五穀豊穣を祈願する“神楽”と“臼太鼓踊り”が奉納される船引神社。一年の祭事に欠かすことのできない大きな存在であり、昔からずっと変わらず地域住民の心の拠り所となっている、そういった想いの伝わる話を語ってくださいました。

● 激しく勇壮な動きが特徴の船引神楽

● 臼太鼓踊りの様子

● ご本殿にある見事な雲龍巻き柱

平成26年11月20日

船引神社　宮司

田代 敏徳　たしろ　としのり

昭和32年　10月22日　清武町船引地区に生まれる
昭和51年　日本大学農獣医学部入学
昭和55年　同大学卒業
昭和56年　船引神社に禰宜として仕える
平成元年　船引神社宮司に就任

【第四回】

大御神社

神話のふるさと 特集 全伍回

宮司が語る

【第四回】

大御神社

おおみじんじゃ

天孫ニニギノミコトが、アマテラスオオミカミを祀ったとされる大御神社。
神社創建の伝承と共に、土地にまつわるさまざまな言い伝えを新名光明宮司にお聞きしました。

伊勢神宮との不思議な関係

太平洋を背に、社殿が建つ大御神社。天孫ニニギノミコトが葦原の中つ国に降臨の際、この地に立ち寄り、アマテラスオオミカミを祀ったことから、社が建てられたといわれています。また、神武天皇が美々津からお船出する前に当神社を参拝し、武運長久と航海安全を祈願したともいわれています。

「平成11年に大御神社の本殿奥から『天照皇太神宮』と書かれている古い木札を見つけました。現在『天照皇大神宮』と名乗れるのは本宗である伊勢神宮内宮だけですが、昔は当社が『天照皇大神宮』と称していた可能性が示されました。大御神社の近くにある伊勢ヶ浜や五十鈴川という名称は伊勢と共通点があること、伊勢に日向という地名があることから、やはり“伊勢神宮”とは何か大きな関係があることが考えられます」と語る新名宮司。

大御神社という名称はどこからきたのかという疑問が浮かびます。これには、アマテラスオオミカミの「オオミ（大御）」からいただいたのだろうと、父親から聞いたことがあると宮司が話してくれました。

古事記では、神武天皇が東遷するまで、日向の国が神話の表舞台だったことを思うと、この地にアマテラスオオミカミを祀り、いつしか『天照皇大神宮』と呼ばれていたとしても不思議ではない。そういう想像をふくらませるのも神話のロマンがあります。

● 日向灘に面する柱状岩の上に建つご社殿

● 「さざれ石の神座」はニニギノミコトが大海原を眺望された場所と伝えられている

● 境内東側にある鵜戸神社の社の前から入口を見ると、天に昇る白龍の姿が現れる

地域をつなぐ例大祭

大御神社で毎年10月に行われる「宵祭り」は、1年の中で最も賑わいを見せる日です。宵祭りでは、巫女舞である豊栄・浦安・悠久の3つの舞と宮司による朝日舞、延岡の大峡（おおかい）神楽保存会による神楽11番、獅子舞が奉納されます。特に巫女舞と天翔獅子の獅子舞は大変人気があり、平成26年には、奉納を見学するために約1600人が訪れました。

● 宵祭り（巫女舞）

新名宮司が神主になった当時、大御神社の神楽は廃れており、なんとか神楽を復興させたいと思っていました。平成10年大寒の早朝、宮司が海で禊ぎをしている時、光輝く獅子の姿を見たそうです。これを神の啓示と受け取り、ストーリー性のある獅子舞にしたいと、曲から振り付けまで地域住民と一緒に創作し、天翔獅子を完成させたのです。

● 宵祭り（天翔獅子の獅子舞）

以前から大御神社に参拝していたバイオリニストの古澤巌さんは、宵祭りの獅子舞にインスピレーションを受けて『龍神伝説』を作曲。演奏を奉納したいという申し出があったことから、宵祭りの翌日は境内で古澤さんのコンサートを平成23年から、これまで毎年開催しているそうです（平成26年12月現在）。宵祭りはもちろんですが、この境内コンサートにも県内外から多くの方が訪れ、大変賑わいを見せるそうです。

● 古澤 巌 氏による境内コンサート

この地に伝わる神話や伝承を後世に伝えていくことはもちろん、宵祭りを通して、地域活性にも貢献したいと力強く語る新名宮司の笑顔が印象的でした。

平成26年12月6日

大御神社　宮司

新名　光明　にいな　みつあき

昭和23年　4月4日日向市大御神社　社家に生まれる
昭和42年　日向工業高校建築家卒。
　　宮崎市内の建設会社勤務の後、東京にて設計事務所勤務
昭和48年　大社國学館（出雲）にて神道を学び、神職資格を取得
昭和50年　大御神社神職として勤務
平成 6年　大御神社宮司に就任し、今に至る

【第五回】

榎原神社

神話のふるさと 特集 全伍回 宮司が語る

【第五回】

榎原神社

よわらじんじゃ

日南市南郷町の榎原神社が縁結びの神社として有名になったのは、摂社・桜井神社に祀られる万寿姫の存在が大きいようです。

神社にまつわる伝承とともに、万寿姫（ますひめ）の話を岩切宗治宮司にお聞きしました。

縁結びや子宝祈願の元となった万寿姫

榎原神社は、第3代飫肥藩主の伊東祐久（いとうすけひさ）公によって、1658年に飫肥藩の鎮守として鵜戸神宮から勧請して創建されました。昔から縁結びにご利益があるといわれていますが、創建にも関わる万寿姫の話を抜きに語ることはできません。

「万寿姫は小さい頃から神仏に興味があり、大人になってからも人々の悩みを解決していたといわれています。当時の飫肥藩主・伊東祐久公は世継ぎができないと悩んでいましたが、万寿姫からの助言を受けて無事に男児を授かります。そこから伊東家の崇敬が篤くなり、万寿姫の願いにより榎原神社は建立されたのです」と岩切宮司は話してくれました。

万寿姫が生きている間は、相談者がひっきりなしに訪ねてきていたといわれるほど、噂が知れ渡っていたようでした。亡くなって摂社・桜井神社に祀られてからも、人々の信仰は篤く、昭和30年頃までは宮崎市内から参拝のための貸し切りバスが出るほどの賑わいだったとか。今でも“縁結びといえば榎原さん”と言われる理由もよく分かります。

● 神仏混交の歴史があり鳥居の先には朱色の楼門が残る

● 2枚合わせになっている「えんむすび絵馬」

● 万寿姫の祀られる桜井神社

境内の建造物に一見の価値あり

拝殿・本殿をはじめ、朱塗りの楼門、鐘楼は大変見応えがあります。

入母屋造の拝殿と両流造の本殿との間に“石の間”と呼ばれる室が設けられた社殿は、権現造風の造りになっています。また、境内に楼門や鐘楼があるのは、昔、貴山地福寺という真言系のお寺が同じ敷地内にあった名残だそうです。

本殿（石の間拝殿を含む）、楼門、鐘楼は県の有形文化財に指定されており、特に鐘楼は、県指定有形文化財建造物の第一号となっています。

毎年11月9日は例祭日で、御神輿が練り歩き、大人から子どもまで参加して地域を盛り上げています。また桜井神社の縁日祭は旧暦の3月15日・16日に行われ、神楽を2番奉納しているそうです。10年、20年の節目には、桜井神社ご神体の御開帳も行われます。最近行われた御開帳は、平成25年だったそうです。

普段の静けさとは変わり、お正月には3万人もの参拝客があるという榎原神社。人々を幸せにしたいと願う万寿姫の想いが今でも神社の中に息づいているのでしょう。

● 目にも鮮やかな拝殿の彫物

● 県下では珍しい袴腰付鐘楼

● 神仏習合の歴史が残り、朱塗りの桜門が目を引く。

平成26年12月15日

榎原神社　宮司

岩切 宗治　いわきり　むねはる

昭和11年　12月17日　日南市南郷町生まれ。
昭和25年　目井津霧島神社で神職に就く。
平成 8年　榎原神社宮司に就任。
目井津霧島神社宮司も兼務している。